

琉球大学学術リポジトリ

近世後期の琉球・奄美における災害：
災害の広域・連鎖的発生に注目して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2014-12-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 浩世, Yamada, Kousei メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/29994

【研究ノート】

近世後期の琉球・奄美における災害

— 災害の広域・連鎖的発生に注目して —

山田 浩世*

The Disaster in Ryukyu and Amami in the second half of Early-modern

YAMADA Kousei

要旨

近世琉球・奄美に発生した数々の災害は、各地域の社会に甚大な影響を与えてきた。本稿では、まず、地域の歴史を体系的に記述した市町村史誌の災害について述べた記述を整理・検討し、近世期の災害がどのように歴史化されてきたのかを考察した。さらに、災害の歴史化の過程の中で看過されてきた問題、とりわけ災害の地域的広がりや激変する気候変動との関係に着目し、近世後期に発生していた災害の歴史的位相について再検討を試みた。本稿の検討を通じて沖縄・奄美における災害は、地域社会の構造的脆弱性に左右されつつ発生・拡大し、地域社会のさまざまな側面に甚大な影響を与えており、社会の歴史的展開に密接に結びついた重要な問題であることが明らかとなった。

Numerous disasters occurred in Amami during the Early-modern of Ryukyu had enormous impact on local communities. In this paper, firstly, historical disaster records were sorted out and summarized based on the local chronicles that have been systematically recorded; and it examined how have the disasters in the modern time been historicized. Finally, it focused on the neglected issues by historicizing the disaster records, in particular interaction of disaster expansion in the region and dramatic change of climate, further tentatively discussed the historical phase of disasters occurred at the late period of Modern time.

* 琉球大学島嶼防災センター特命助教 Disaster Prevention Research Center for Island Regions

はじめに

近世期の琉球・奄美地域において発生した災害全般（と災害の社会に与える影響）についての研究蓄積は、「宮古八重山津波」（明和大津波⁽¹⁾）に関する人文・自然科学双方からの研究を除けば低調で、限られた成果を見るにとどまっている。18～19世紀という時代は、気候変動に伴う干ばつ・疫病・飢饉などの大規模災害が、東アジアひいては地球全域で展開していたことが古気象学などの蓄積から明らかにされているにもかかわらず⁽²⁾、従来の研究では限られた枠組みの中で災害を地域の歴史に定置しており、災害の広がりとその影響を十分に捉えてきたとは言い難い状況にある（後述）。

また、従来の災害把握の観点は、災害を一過的な出来事として捉える認識の上に展開されており、時代的・社会的な位相が十分に反映されてこなかった。「人間集団と破壊素因が結び付けられたからといって必ず災害が生まれるわけではない。社会は歴史的に作り上げられた脆弱性のパターンをもっており、その文脈の中で、災害は避けられないものとなる」[スザンナ・M・ホフマン、アンソニー・オリヴァー＝スミス 2006: p.7]という先学の鋭い指摘に耳を傾ければ、災害の問題を、地域社会の再構築や展開にいかに関与してきたのかといった長期的な推移の中に位置づけながら問題化していく必要があるだろう。

以上のような問題意識に立ちながら小稿では、①地域の歴史像を構築する上で重要な役割を果たしてきた市町村史誌にどのような災害の歴史が描かれてきたのか、さらに沖縄・奄美地域における災害研究の問題点を整理するとともに、②連鎖的に発生する災害の具体的事例、とりわけ1785年と1832年の大規模災害へといたる広域的・連鎖的状况を取り上げながら、近世後期の琉球・奄美社会における災害の歴史的位相について見て行くこととしたい。

1. 災害史研究の現状と災害の歴史化

これまで近世期における災害はどのように把握されてきたのであろうか。戦後盛んに刊行されてきた市町村史誌中の「災害」に関連する項目を抽出し、災害がどのような枠組みの中で捉えられてきたのか、その傾向を見て行くこととしたい⁽³⁾。

本論に入る前に琉球・奄美地域における災害研究の動向について概観しておく必要があるだろう。同地域における災害として盛んに取り上げられてきたのは、1771年に発生した宮古・八重山諸島における「宮古八重山津波」（明和大津波）である。同災害にまつわる研究は、文理の学問領域を超えて取り上げられてきた経緯を持ち、研究の嚆矢は[牧野 1968]にある。同著作は、八重山地域における歴史的災害としての大津波を捉えた金字塔的作品で、その後の研究に大

きな影響を与えてきた。牧野の研究に触発されるように、宮古島における津波の被害を伝える「御問合書」（思明氏家譜付属文書）に関する分析なども〔島尻1988〕によってなされている。

また、大津波によって運ばれたとされる津波石の理科学的手法による研究も、行われており〔河名・中田 1994；河名 2006；加藤 1983,1989〕、文献上の津波の襲来と石の移動の整合性などが盛んに議論されてきた。これら津波石への分析が進められる中で1771年の大津波だけでなく、先島地域に数度の歴史的な大津波が襲来していた事実、その一つは「宮古八重山津波」をも越えるものであったことが確実視される「沖繩先島津波」などが比定されるようになってきている〔河名 2006〕。また、後藤和久は、インドネシア西部で発生したインド洋大津波（2004年）に伴う津波石の着岸・出現状況の分析を援用しながら、琉球列島全域における津波石調査を行い、過去2300年間において歴史的な大津波が先島地域に襲来していたこと、逆に沖繩本島・奄美諸島周辺に同規模の津波石が現段階までには確認されていないこと〔後藤 2011〕、琉球弧が古文書記録の残存という条件とともに世界的な沿岸巨礫研究フィールドの可能性を秘めていることを指摘している〔後藤 2009〕。これら津波石の移動・年代に注目した研究のほかに、考古学の成果から大津波の痕跡を読み取ろうとの試みも見られ、〔考古ジャーナル編集委員会 2008〕などで災害をテーマにした特集が組まれてきた。

このように「宮古八重山津波」研究を始点とする災害研究は、文理の壁を問わず蓄積されてきているが、一方で災害研究全体における特定のテーマへの集中という状況も見られる。例えば、「宮古八重山津波」を除く地震や津波、台風や高潮、干ばつ、疫病などといった沖繩・奄美に常襲した災害への分析がその例であろう。そもそも各種災害の経年的な把握や地域社会への影響といったものを体系的に把握する作業が低調なこともあり、過去における災害の影響を現代的な災害感覚から推し量る傾向にあり、災害を重要な社会問題として捉える観点が欠如してきた。災害は、沖繩・奄美地域社会の基底的な社会規範・様式を成立させた近世という時代にどのような影響を与えてきたのかといった問題へのアプローチは、今まさに緒についたばかりである。

近年にいたって、災害研究が特定のテーマに集中するという状況に対し〔高良 2008〕が示されている。同研究は、経年的な災害の発生状況と災害に対する諸施策・動向を歴史文献から抽出したもので、近代以降の琉球気象台（現在沖繩気象台）のデータとつなぎ合わせることで、一貫した災害発生の動向を概観することを可能としている。もっとも、より精緻な情報の収集と蓄積は、今後の課題として残されてもいる。

以上、概観に紙幅を費やし本論に先行する話しとなったが、琉球弧の島々を対象とする災害研究の展開状況を示した。次に限られた中ではあるが、従来の

研究が近世期における災害をどのように歴史化してきたのか見て行くこととしたい。市町村史誌（主に通史編）の前近代期の項目の中で災害を取り上げているものをダウンロードの表として整理したので、検討を加えてみたい。

1-1: 沖縄本島

沖縄本島の市町村史誌（通史編）に立てられた項目の中で、前近代期の災害と関連して項目を立てていたのは、3市町村史誌であった。順にあげれば、『国頭村史』（1967年刊行）・『コザ市史』（1974年刊行）・『久米島具志川村史』（1976年刊行）である。

沖縄本島の市町村史誌全体で、三事例のみが見出され、『沖縄県史』や『那覇市史』といった大分のシリーズを持つ史誌類などでは、多少の記載〔西里 2005〕はあるものの、災害が項目内に取り込まれていなかった。

『国頭村史』では、第四編四章6の「近世における国頭間切の災害」に災害との関連を述べた項目があり、比較的整理されながら災害の事例が記述されている。同項目には、「沖縄の歴史はそういう（筆者注：台風・飢饉・水害・潮害）自然の猛威との戦いの歴史であったといってもよく、沖縄人の性格形成にも様々の影響を与えた」〔国頭村役所 1967：p167〕と述べ、その状況を国頭間切を中心に記述している。

表1：沖縄・奄美地域の市町村史誌（通史）中の災害項目一覧

市町村	市町村史誌名	発行年	記載項目名／頁
国頭村	『国頭村史』	1967年	第四編四章6（近世における国頭間切の災害、166～77頁）
コザ市（現在は沖縄市）	『コザ市史』	1974年	第五章一節二項（丑年の飢饉と農村の疲弊、211～3頁）、第六章一節四（疲れ間切となった越来・具志川、256～259頁）
具志川村（現在は久米島町）	『久米島具志川村史』	1976年	第四章十（近世の災害と農民の疲弊、175～81頁）
平良市	『平良市史 第一巻通史編 I 先史～近代編』	1979年	第六章（近世宮古の災害と事件、210～14頁）
多良間村	『村誌たらま島』	1973年	第1章（孤島の天災、106～9頁）
名瀬市	『名瀬市史(上)』	1968年	第一章中の小項目（名瀬市の災害、26～32頁）
瀬戸内町	『瀬戸内町誌 歴史編』	2007年	第四編三章二節（飢饉、災害、疾病について、317～23頁）、同四章一節二（大飢饉救った英傑当済衆、337～9頁）
喜界島	『喜界町誌』	2000年	第五章五節（人口と災害、200～5頁）、第七章六節（喜界島と米、飢饉、漂着、304～13頁）
徳之島町	『徳之島町誌』	1970年	第二篇五章六（島民を苦しめた災害、107～14頁）
天城町	『天城町誌』	1978年	第四編十二章（災害、593～604頁）
与論町	『与論町誌』	1988年	第三編一章六節（疫病や自然災害と医療の概要、332～5頁）

*災害項目の確認は、市町村単位で刊行されたものを使用し、字誌などは割愛した。

**災害の項目は、自然災害及び飢饉に関連した項目を抽出の対象とした。船の漂流・漂着に関する項目は除外した。

項目中では『球陽』の関連記事を取り上げ、1709年・1784年・1825年・1832年・1848年の台風の襲来と飢饉の状況を紹介している。その中で地域社会は甚大な被害を蒙っており、災害の防止について「百姓は無為無策に等しかった」ことがその後の被害の拡大を招いたと指摘している。さらに王府は財政の窮乏を背景に、当面の対策に終始し、蔡温を除く政治家が十分な施策をとらなかったこと、後年には地方富裕層に褒賞を与え王府の肩代わりをさせたなどといった諸点を論じている。

『国頭村史』中の論点や方法は、後述する市町村史誌にも見られる特徴を持っており、現在の琉球史研究全体においても継承されてきた論点である。例えば、『球陽』のみによって災害の事例を把握しようとする方法や王府・地方役人層と百姓を二項対立的な枠組みによって窺える視点であり、改めて検討を要する問題を抱えている。この点については後段で言及することとしたい。

コザ市（現在の沖縄市）は、王国時代は越来間切と称されていた地域で、該当の記述は、第五章第一節二項の「丑年の飢饉と農村の疲弊」と第六章一節四の「疲れ間切となった越来・具志川」がある。前者は「丑年の飢饉」（1709年）を取り扱ったもので、両項目とも農村の疲弊を論じながら災害を議論したものとなっている。論旨の力点は農村の疲弊にあり、災害の記載もその文脈を補強する上で登場している点が『国頭村史』と共通する特徴と言える。

『久米島具志川村史』該当の項目は、第四章十「近世の災害と農民の疲弊」である。タイトルからも推察されるとおり、先に指摘した各市町村史誌と共通したスタイルの記述が行われている。異なるのは、災害の事例を『美濟姓家譜』・『巫馬氏家譜』の記載から抜粋した点で、ここでは疫病・飢饉・台風などの災害が列挙され、さらに、夫役銭（や夫遣）や定代（物資の公定価格）などの例を示しながら、百姓の身売りなど、王府・地方役人層による搾取を助長したものとして災害を描いている。

ここまで沖縄本島周辺の市町村史誌において災害を取り上げたものを紹介した。ここに挙げたものの外にも近世期における地域の疲弊状況を述べた項目は多いが、明確に災害を項目名に取り入れ叙述したものは、先に列挙した三つであった。市町村史誌の刊行状況から、資料編の整備段階にあり通史編を刊行していない市町村があること、字誌などを検討に入れていないなどの点について考慮する必要があるものの、大勢としてこれまでの地域史の叙述の中で災害の項目は、決して多いものではなかったことが指摘できよう。

また、災害を項目化する際の特徴として、『球陽』等から災害を時系列的に列挙し地域の疲弊を象徴するものとして取り上げ、それらを「無為無策」のなかに置かれた百姓の困窮、王府・地方役人層による搾取の歴史を語るものとして示す傾向が見出された。また、市町村史誌であることに起因する問題でもあるが、災害の把握が各地域（最大でも王府、琉薩関係）という限定的な広がり

中で捉えられ、すべてが一過的な出来事として恒常的に繰り返されてきたもの
の一部として認識される記述も多く見られた。果たして各災害は、一過的な繰
り返され、それぞれが断絶した出来事として存在したのであろうか。

1-2: 宮古諸島地域

宮古地域の市町村史誌において災害を項目に立てているのは、『平良市史』
(1979 刊行) と『村誌たらま島』(1973 年刊行) である。

『平良市史』における該当の項目は、第六章の「近世宮古の災害と事件」で
ある。宮古及び八重山地域は、1771 年の「宮古八重山津波」を直接的に経験し
た地域で、同項目内においても地震・大津波の項目が置かれている。また、飢
饉・疫病・台風についても述べられ、1836 年の「申年風」、1844 年の「辰年風」、
1852 年の「子年飢饉」、1854 年の熱病の流行などが述べられている。これら体
系だった災害叙述の背景には、慶世村恒任著『宮古史伝』の災害の項目の存在
や災害被害に言及する史料の多さが起因していると考えられる⁽⁴⁾。

『宮古史伝』は、宮古島を中心とする初の通史的著作で、1927 年に刊行され
た先駆的成果である。同書中には、第二編七章「津波に関する伝説」や第四編
第六章「天災地変」の項目があり、宮古島地域における災害の経年的な発生状
況を叙述しようとの姿勢が窺える〔慶世村 1927 (新版 2008)〕。具体的には、
寛文の地震・元禄の大雨・久貝村の隕石・明和の大海嘯・申年の暴風・天保の
地震・辰年の暴風・子年の飢饉・明治元年の地震などといった項目が拾われて
いる。

『村誌たらま島』では、第 1 章の中に設けられた小項目の中に「孤島の天災」
があり、短い記述で『宮古島在番記』から災害の記事が抜粋・列挙されている。
また、「宮古八重山津波」については『球陽』の記事を引用しての簡便な説明が
加えられており、全体として災害事例を経年的に叙述するスタイルがとられて
いる。

1-3: 八重山諸島地域

八重山地域では現在まで石垣市と竹富町で通史編が編まれておらず、本稿の
取る抽出方法では、該当する史誌を見つけることができないが、八重山地域は
1771 年の「宮古八重山津波」の最大の被災地域で、資料編に「宮古八重山津波」
に関する史料「大波寄揚候次第」や「大波之時各村之形行書」などを収録した
〔石垣市総務部市史編集課 2008〕が刊行されている。通史編の欠如に起因す
る問題であるが、「宮古八重山津波」以外の項目が取り扱われておらず、災害と
される問題の対象が「宮古八重山津波」に集中する形となっていることは地域
的特徴と言えよう。

1-4: 奄美諸島地域

奄美地域の市町村史誌において前近代史の項目に災害を取り上げていたのは、『名瀬市史（上）』（1968年刊行）・『瀬戸内町誌歴史編』（2007年刊行）・『徳之島町誌』（1970年刊行）・『天城町誌』（1978年刊行）・『喜界町誌』（2000年刊行）・『与論町誌』（1988年刊行）の6つであった。

『名瀬市史（上）』では、第一章中の小項目「名瀬市の災害」が設けられている。項目内では、「大島気象災害史」と題された年表形式の一覧が、1609年（慶長14）から1957年（昭和32）までの台風災害を中心に作成されている。前近代部分についての主な典拠史料は、「大島代官記」や「喜界島代官記」からなるが、事例総数は13で近代以降の事例が大半を占めるものとなっている。

『瀬戸内町誌歴史編』の該当の項目は、第四編三章二節の「飢饉、災害、疾病について」と同四章一節二の「大飢饉救った英傑当済衆」である。前者は、台風・凶作・飢饉・疾病等の事例を島毎（大島・喜界島・徳之島・沖永良部・与論）の『代官記』等から抜粋し、時系列順に列挙したもので、これら一覧についての解説等はなく、記事を網羅するに止まっている。後者は、『南島雑話』に紹介された当済なる人物を取り上げたもので、大飢饉の際に蔵米を自らの判断で供与した人物とされ、地域の英雄として描かれている。

『徳之島町誌』の該当の項目は、第二篇五章六の「島民を苦しめた災害」である。第五章自体のタイトルが「徳之島前録帳よりみた近世の徳之島」となっているように、災害も「徳之島前録帳」の記載に拠りながら当該地域で起こった災害の事例を時系列的に整理したものとなっている。ただし、「徳之島前録帳」には、比較的豊富な災害の記述があり、その中から1814年の台風災害、1851～1856年にいたる連年の寒波による飢饉・疫病の発生等が具体的に紹介されている。また、大火の事例や疱瘡の流行なども取り上げているが、地震の記録は取り上げられていない。ほぼ同様に『天城町誌』も、第四編十二章に「災害」の項目を設けているが、「前録帳」の記載に基づき災害を列挙するスタイルをとり、「御救米」（救援米）が最終的には上納額に加算され、薩摩側の苛烈な搾取が並行して進められたことを述べている。

『喜界町誌』の該当の項目は、第五章五節の「人口と災害」と第七章六節の「喜界島と米、飢饉、漂着」である。前者は、人口動態を整理しその変動を一部災害の発生と関連させて説明を加えている。また、飢饉・疫病・台風などの自然災害などについて取り上げ、「喜界島代官記」を中心にしながらも「家譜資料」や琉球側の史料などを用いて、「御救米」や「間引」、黒糖生産への転換による飢饉の拡大などといった問題を取り上げている点を特徴として挙げるができる。後者の項目では災害の発生、特に飢饉に対して行われた琉球・奄美・薩摩間における救済米の展開状況が詳解されている。

『与論町誌』の該当の項目は、第三編一章六節の「疫病や自然災害と医療の

概要」であるが、災害記録はほとんど取り上げられず、1778年（安永7）以降のものが列挙されるに止まっている。

以上、奄美地域における市町村史誌中の災害関連の項目を整理した。沖縄の市町村史誌と共通する傾向として、多くの市町村史誌で「代官記」を用いて災害事例を抽出・列挙するという記述スタイルが見られた。また、災害の叙述は、薩摩による搾取を軸にして、百姓層の困窮・疲弊に結びつけて記述される傾向が見られた。一方で、災害に対する「無為無策」といった認識は見られず、『喜界町誌』に描かれたように単一的な黒糖増産の推進によって飢饉に対する構造的な弱さが作り出されていったとする指摘、救済米の問題から琉球・奄美・薩摩間の融通による災害への対応に多くの記載をみることができる。

ここまで沖縄・奄美の市町村史誌の記載状況について検討を加えてきた。共通して見出された点を整理すると、第一に、災害を記載した項目は、主に編年体の史料群から記事を抽出し整理するものが多く、各災害を一過的な出来事として網羅的に記載する叙述スタイルが採られる傾向にあった。その中では各災害のつながりや影響関係などは考慮されておらず、それぞれが独立したものとして扱われていた。このことはすなわち、市町村史誌型の災害把握とは、発生する各災害の実態的ひろがりや背景などとは結びつけられず、単一の史料に基づいて各市町村史誌の対象とする範囲の中で災害を描き出すという作業に終始するものであったと言えよう。

第二に、災害の発生を政治史的な文脈の中に定置し叙述しようとする構図が多くの場合で見られた。例えば、間切疲弊の遠因としての災害や、各地域の集落の移動に伴う災害、薩摩による重層的な搾取といった問題が災害を取り上げるための前提とされていた。その意味で災害の歴史化は、孤島苦の表現とともに王府・地方役人層または薩摩による搾取の文脈の中で語られ、人々は艱難辛苦を味わったとする認識へと収斂させるものとなっていた。

では、地域毎の限定的な枠組みの中で分割的に記述されてきた災害の実態的広がりや、どのように捉え直すことができるのであろうか。次章では、試みの一つとして災害の実態的広がりを複数の史料から描くとともに、各災害の発生と社会への影響関係を飢饉研究・古気象学研究成果を援用しつつ論じていくこととしたい。

2. 近世後期の災害の発生とその広がり

近世後期に発生していた災害はどのような広がりを見せていたのであろうか。災害発生の広域・連鎖的な広がりやあり方に注目して見ていくこととしたい。具体的な検討に当たっては、天明の大飢饉との関連が推測される1780年代の大

飢饉、天保の大飢饉との関連が推測される1832年の台風・大飢饉災害の事例を取り上げていくこととする。

2-1:1780年代における大飢饉の発生と農村の疲弊化

「琉球処分」前夜へと至る18世紀後半から19世紀前半にかけての時代に、農村の疲弊化と支配矛盾の拡大が深刻化していたことが金城氏の研究によって明らかにされている〔金城 1977〕。同じく西里氏も同時期の琉球社会の疲弊・窮乏化について言及し、その原因を頻発する災害とそれに伴う労働人口の減少、天水田に依存した生産基盤の脆弱性、王府の抜本的救済策の欠如が一因として働いていたことを挙げている〔西里 2005〕。筆者も近世後期における金城・西里氏の見通しに概ね賛同するものであるが、ここでは今少し疲弊化の一因とされた災害の発生要因とその影響を異なる側面から掘り下げてみたい。

『球陽』に拠れば、1785年（乾隆50）「本国大いに餌乏、万民困窮す。既に倉廩を発して救助するも、而も粟米足らず。此れに因りて、國中及び各島の、凡そ錢穀有る者に飭行し、奉借して以て国用に備ふ」〔球陽研究会編 1974：pp.403-405〕とあって、非常の大飢饉が発生し、貯蓄の食糧も底をつき、國中の富裕者に米錢を供出する指示が出されていたことが見える。

前年の1784年の災害についても『家譜』に記事が見え、一例を示せば、具志川間切検者であった「柯姓家譜」四世房慶の1786年（乾隆51）の記事に「多年疲入候上去々年（1784）大凶歳付而者、猶亦上納未進相増身売餓死人等茂及太分極々難儀仕事候」〔那覇市企画部市史編集室編 1982：pp.120-121〕とあって、すでに具志川間切では上納未進の大凶作、すなわち農業生産の不振から身売りや餓死人が多々発生していたことを見ることができる。また、1782年（乾隆47）頃から「近年諸郡屢逢颶旱五穀不登貢賦有欠宮古八重山両島亦如此」〔那覇市企画部市史編集室編 1983：p.7〕とあって、両先島（宮古・八重山）地域で台風や干ばつが発生し、五穀が実らず年貢未進の状態にあった。もっともこれら『家譜』や『球陽』に記された1784～85年の大飢饉の発生は、1782年の比ではなかったことが残された文書件数からも推察され、琉球全域にわたって飢饉の発生と甚大な被害があったことが知られる。

同時期の日本ではつとに有名な江戸四大飢饉の一つ、天明の大飢饉（1782～87年）が発生しており、多くの地域に甚大な影響を与えていた。同飢饉は1785年をピークとし、東北地方を中心に多くの餓死者を出した災害であった。日本では1783年（天明3）3月12日に岩木山（青森県）、7月6日に浅間山（長野県）が噴火し大量の火山灰の噴出、それに伴う日射量の低下による冷害が引き起こされたと言われる。もっとも浅間山に先立って同時期にアイスランドのラキ火山・グリムスヴォトン火山が巨大噴火を起こしており、これらが北半球全域に低温化と冷害を誘発させていたことが最大の原因であるとも言われる。

さらに1780年代は、いわゆる気温変化の激しい小氷河期の変わり目に位置していた。古気象学の成果に拠れば、近世後期における気候変動は、1740～80年が温暖な時期、1780～1820年が寒冷な時期及び1820～50年が非常に寒冷な時期に区分されており、1780年代とは気候変動による影響を強く受けた時期であった〔前島・田神 1982〕。また、稲作を中心とする近世期の日本社会は冷害に弱い社会的特質を持っていたことも指摘されている〔原田 1999〕。天明の大飢饉もこの世界的な気候変動の影響を強く受けたものとされており、同時多発的な飢饉の発生が世界中で見られた。

『球陽』や「家譜」には1785年前後の飢饉についてその原因は示されないものの、琉球全域にわたる広域かつ大規模な飢饉の発生状況を確認することができる。先に見たように王府も国内で富を蓄積していた地方富裕層から米銭を奉借し、飢饉への対策を計っていたが、飢饉の発生による餓死者は1785年をピークに数年続いており、飢饉が繰り返し発生していたことが分かる。

関連して18世紀末以降の農村の疲弊化に注目し下知役の設置によるさらなる農村の監督強化、王国末期へと至る社会の支配矛盾の拡大の端緒を指摘した議論〔金城 1968〕がある。そもそも下知役はなぜ1780年代以降、急速に設置される状況となったのか、換言すれば、なぜ農村は1780年代に急激な疲弊化の状況を露呈し始めたのであろうか。

農村に下知役が多数設置されていくその時代は、確認したように日本では火山灰の影響による冷害化と数十年単位で激しく変化する気候変動の影響で、飢饉が発生していた。原因については今後のさらなる検討を必要とするが、琉球全域にわたる飢饉の大規模な発生自体は確認することができる。1780年代における広域的な飢饉の発生と前後して下知役の設置は進められており、王府搾取と支配矛盾の拡大が進んだとされる背景に、広域かつ大規模な災害の発生が影響していた可能性が示唆されよう。今後の検討課題としたい。

2-2:1832年の台風・大飢饉と災害の広がり

1832年に沖縄島に襲来した台風は、『球陽』にその被害が記されている。それに拠れば被害は、台風の直撃により23名が死亡し、人家3293戸、倉庫23戸を倒壊させ、船舶990隻、諸施設・作物に被害を与え、玉城では大波によって人家7戸が浸水、久志でも大波の影響で10名の死者と人家47戸が流されたという〔球陽研究会編 1974：p.503〕。ここでは同災害の歴史的位相を、より広域・連鎖的な視点から捉え直してみたい。

1832年に襲来した台風の前後の出来事を時間軸に沿って見てみると、この年の沖縄島では、6月以来雨が降らず旱魃が発生し、王府は、雨乞い祈願を大々的に行いその間の家畜の殺生を禁じるなどの措置を取っていた。同記事に拠れば、9月3日になってようやく雨が降ったとあり、長期にわたって日照りが続いて

いた〔球陽研究会編 1974：p.502〕。念願の降雨直後の9月10日、そこに先程述べた強力な台風が襲来した。その後も異常な天候が続き、9月29日には金武で大きいもので茶碗大ほどの雹も降っている〔球陽研究会編 1974：p.504〕。

このように同年は、雨が降らず干ばつとなり直後に台風が襲来するなど、さまざまな災害に見舞われた年であった。打ち続く災害の爪跡を象徴するように『球陽』には、この年の暴風と旱魃によって、秋から翌年の春までに大飢饉が発生し、王府は備蓄食料を出して対策を講じたものの、最終的に2455人の餓死者と疫病の発生からさらに1473人の死者を出していた〔球陽研究会編 1974：pp.504-505〕。

このように干ばつのみならず台風の襲来、飢饉・疫病の流行などによって、災害は連鎖的かつ大規模に展開し、大きな被害を出していた。従来、それぞれの災害の発生は個々に整理され、例えば、台風被害の記録や飢饉の死者数などが断片的に取り上げられながら示される程度であった。また、同年の災害については、より広域的な視点から捉えなおすことが可能である。

同災害の記録は、奄美地域でも確認され猛威を振るっていた。1832年の台風、1832年から33年にかけての飢饉に前後する状況を奄美に残された記録や当時日本各地で発生していた天保の大飢饉の主要因と照合しながら見ていくこととしたい。

「大島代官記」の1832年（天保3）の記事に拠れば、奄美では「此御代春先余寒強、唐芋植付不相調黍生立悪敷、六月ヨリ八月初マテ大旱魃、九月十一日稀成非常之大風諸作大痛、十月頃ヨリ一統飯料支山野弄ニテ漸ク助命ス」〔松下志朗編 2006：p.86〕とあって、干ばつ・台風・凶作であったことが述べられている。詳解してみると、この年、春先は余寒が強く、サツマイモが不作でサトウキビの生育が悪く、6月から8月初めまで大干ばつであった。また、9月11日には、非常に強力な台風が上陸し、諸作物に大きな被害を出しと記されている。結果的に10月頃からは島全体で食糧難となり、山野から食料を調達してようやくにして助命なるという状況であったことが分かる。徳之島においても『徳之島前録帳』の記事から同様の災害が発生していたことが知られる⁽⁵⁾。

先に見た沖縄における1832年の状況と照合すると、9月に至るまでの干ばつ、9月10日前後における強力な台風の襲来、その後の飢饉の発生といった、共通する現象が琉球弧一帯の島々に発生していた。また、注目したいのは、奄美における「春先余寒強」の表現である。古気象学の成果に拠れば、1830年代は、1780年代に続いて低温化が日本全体で見られた時期である。天明・天保期では九州においても冬の寒さが強烈で、春先の余寒も強く、秋にかけて多雨・低温という気候不順に見舞われたことが指摘されている〔太田 1993〕。日本全域で1833年と同様の現象、すなわち冷夏と秋冷、洪水・台風が発生し大凶作をもたらし、天保の大飢饉を引き起こしていた〔谷治・三澤 1981〕。

沖縄・奄美における災害発生の状況を見る限り、多雨の状況が異なるものの強烈な干ばつの状況が見られた。稲作への影響が強い低温化現象が奄美で見られ、同時期の冷害による影響が少なくとも奄美の島々にまで影響を与えていたことが確認できる。奄美における冷害の確認、沖縄における広域的な異常気象など、連鎖的な災害が大飢饉を発生させていたことを指摘できよう。

1832年において沖縄・奄美で発生していた災害は、このように広域的な現象（冷害）との連関が示唆され、強烈な気候変動や異常気象が展開していた。さらに同様の気候不順の影響は1836年にピークを迎えており、同年にも沖縄・奄美で干ばつや凶作が広く記録されている⁽⁶⁾。1832年における出来事は、単なる不運な巡り合わせの中で発生した一過的な災害ではなく、地球規模の気候変動の中で展開していたものと考えられ、大規模災害の発生（とそれによって生じた社会変化）が、当時の社会に甚大な影響を与えていたことを伝えている。

おわりに

ここまで近世琉球・奄美地域で発生していた災害をめぐるいくつかの問題（災害の歴史化の問題点、災害と気候変動、災害への構造的脆弱性）について論じてきた。最後に本稿で明らかとなった問題をいくつかのポイントに絞って整理し、今後の課題を述べて本稿の結びとしたい。

まず、市町村史誌の記載を手がかりに従来の災害研究における災害把握のあり方を検討すると、その多くが①編年体の史料からの災害事例の限定的抽出、羅列的整理によって災害を分割的に把握してきたこと、②災害の襲来が、琉球では王府・地方役人層、奄美では薩摩による搾取の文脈の中で語られ、人々からの収奪の歴史の一端の中に位置づけられて語られる傾向を持っていることが見出された。

ついで、先に明らかとなった災害の羅列的整理による分割的把握の問題点を踏まえ、災害発生の背景とその実態的広がりをつまえる試みとして、1780年代・1832年に発生していた一連の災害事例に検討を加えた。その中で、両災害の発生とその被害の拡大・長期化を招いていた背景には、地球規模で発生していた気候変動の影響、とりわけ広域的な災害の発生が影響し、農作物の不作など深刻な被害が出ていたことを確認した。数十年続いた温暖な安定の時代からの急激な気候変動とそれに伴う社会不安が、金城氏が述べるような農村の疲弊化〔金城 1968〕を露見させる素因となっていた可能性についても触れた。さらに、これら一連の災害は琉球全域のみならず奄美、さらには日本での大規模災害と連動していた可能性が推察され、広域・連鎖的な災害の発生、それにとまなう社会への甚大な影響の広がりを確認した。

最後に、取り上げることでできなかった問題を挙げ、今後の課題としておきたい。まず、より精緻な議論を必要とするが、広域かつ連鎖的な災害に対し高い確率で琉球社会に発生した飢饉への構造的な脆弱性がどのように形成されたのかという問題がある。近世後期における農村の疲弊・窮乏化という問題は、単なる一過的な出来事としての災害の襲来を主因とするものではなく、近世という時代の中で積み上げられてきたより構造的な脆弱性に起因しているのではないだろうか。

さらに、災害発生に対し災害の拡大を防ぐような措置が存在したはずで、「無為無策」のままであったとは考えにくい。災害によって地域社会が深刻なダメージを被った後、どのような復興、地域社会の再構築が行われてきたのであろうか。その中では備荒食物の導入や風水の導入など、災害に対する絶え間ない関係性の構築が行われてきたと考えられるが、それらの成否や現在に至るまでの地域社会への影響関係といった問題は明らかにされていない。残された課題は多いが、今後の研究に期すこととしたい。

【付記】

本稿の作成までに、島嶼防災研究センターの進める「社会科学及び自然科学の統合による自然災害の予測と分散機構の解明」、国際沖縄研究所の進める「人文・社会科学を主体とした先端的琉球・沖縄学の次世代研究者および地域リーダーの育成・研究推進」、トヨタ財団研究助成プログラム「沖縄・奄美島嶼社会における地域形成と災害分散機構の歴史の変遷に関する包括的研究」からの支援を賜った。記して感謝申し上げたい。

【注記】

(1)1771年に先島地域において発生した大地震とそれに伴う大津波を最初に体系的に論じたのは〔牧野 1968〕で「明和大津波」と称したが、その名称について〔豊見山 2008〕は、当時の用語として「宮古八重山津波」が用いられていたことを指摘し同時代的な用法に即した用語の使用を提起している。本稿でも同時代・該当地域における歴史の実態に即した用語使用の妥当性を認め「宮古八重山津波」の語を用いることとし、必要に応じて「明和大津波」などの両名称を併記することとしたい。

(2)〔ブライアン・フェイガン 2001〕は、西暦900年～1200年頃までは温暖期、1300年頃～1850年頃までが小氷河時代であったことを示し、気候の変化は緩やかなものではなく急激に変化し人間社会に大きなインパクトをもたらしてきたことを指摘する。

(3)沖縄県さらに奄美地域を含む市町村史誌の刊行状況については、〔財団法人南西地域産業活性化センター2003〕が有用である。

- (4)宮古島地域における災害史料については、[砂川 1994] が詳しい。
(5)『徳之島前録帳』にもほぼ同様の記事があり、6月から8月末まで干ばつ、9月11日前後の台風と高波によって多大な被害が出たことを記している [松下志朗編 2006 : p.285]。
(6)沖繩・奄美で干ばつと台風による凶作・飢饉が起こっていた [球陽研究会編 1974] (1743号, 1758号)、[松下 2006 : p.88]。

【参考文献】

- 石垣市総務部市史編集課 (2008)『石垣市史叢書 12「大波之時各村之形行書・大波寄揚候次第」石垣市、沖繩。
太田貞明 (1993)「樹木年輪の分析からみた日本の小氷期」『地学雑誌』102、pp.107-118、東京。
加藤雄三・木村政昭 (1983)「沖繩島石垣島のいわゆる「津波石」の年代と起源」『地質学雑誌』89、pp.471-474 東京。
加藤祐三 (1989)「新発見史料「御問合書」にみる宮古群島での八重山地震津波」『琉球大学理学部紀要』47号、pp.153-158、沖繩。
河名俊男 (2006)平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書『暦年代に基づく琉球列島の完新世海面変動と地殻変動及びサンゴ礁の発達史』琉球大学教育学部、沖繩。
球陽研究会編 (1974)『球陽』読み下し編、角川書店、東京。
国頭村役所 (1967)『国頭村史』国頭村役所、東京。
慶世村恒任 (1927; 新版2008)『新版宮古史伝』富山房インターナショナル、東京。
考古学ジャーナル編集委員会編 (2008)「考古学から見た環境と自然災害」『考古学ジャーナル』577、pp.3-32、ニューサイエンス社、東京。
後藤和久 (2009)「津波石研究の課題と展望—防災に活用できるレベルにまで研究を進展させるために」『堆積学研究』Vol.68, No.1、pp.3-11、大阪。
後藤和久 (2011)「最新科学が明かす明和大津波と東日本大震災が残した教訓」宮古島市教育委員会主催講演会発表レジュメ (於宮古島市中央公民館大ホール)。
島尻克美 (1988)「宮古島の津波に関する一史料」『文化課紀要』5号、pp.1-10、沖繩教育委員会、沖繩。
スザンナ・M・ホフマン、アンソニー・オリヴァー＝スミス/若林佳史訳 (2006)『災害の人類学』明石書店、東京。
砂川玄正 (1994)「近世時代後期における宮古の自然災害」『平良市総合博物館紀要』1号、pp.1-53、平良市総合博物館、沖繩。
高良倉吉 (2008)平成17年度～平成19年度基盤研究(B)『沖繩の災害情報に関する歴史文献を主体とした総合的研究』、研究代表者高良倉吉、沖繩。
谷治正孝・三澤明子 (1981)「天保飢饉前後の気候に関する一考察」『横浜国立大学紀要第二類』

28、pp.91-108、神奈川。

那覇市企画部市史編集室編（1976～83）『那覇市史』資料編第1巻5～8、家譜資料（一）～（四）、
那覇市企画部市史編集室、沖縄。

南西地域産業活性化センター編（2003）『沖縄県における地域歴史書刊行事業の成果とその意義』
南西地域産業活性化センター、沖縄。

原田信男（1999）「日本の飢餓—中世・近世から近代へ」『飢餓』ドメス出版、pp.20-41、東京。

ブライアン・フェイガン／東郷えりか・桃井緑美子訳（2001）『歴史を変えた気候大変動』、河
出書房新社、東京。

前島郁雄・田神善夫（1982）「中世・近世における気候変動と災害」『地理』27（12）、pp.33-43、
古今書院、東京。

牧野清（1968；改訂増補1981）『八重山の明和大津波』、沖縄。

松下志朗編（2006）『奄美史料集成』南方新社、鹿児島。